

ブルックナーの交響曲における「漸次的結合の構想」と総休止

池上 健一郎

本論文は、アントン・ブルックナー（1824-1896）の交響曲が持つ大きな特徴の一つとして広く認知されながらも、これまで本格的に研究されることはなかった総休止（ゲネラルパウゼ）を、作品の全体構想との関連において再評価することを目的とする。考察の中心となるのは、初めは異質で結びつきがたいものとして呈示される複数の主題が、楽章の進行とともに次第に歩み寄り、最終的には結合するという全体構想である。

この「漸次的結合の構想」は、《交響曲二短調「第 0 番」》の終楽章にその「祖型」を見出すことが可能であるが、《第 0》の次に作曲された交響曲、すなわち《交響曲第 2 番》第 1 稿の終楽章において一層明確となる。その際ブルックナーは、この構想に寄与する重要な要素として総休止を用いている。すなわち《第 2》の総休止は、一方では音楽的断絶として主題の非結合性を明示し（T.76-78）、他方では後続楽節への注意の喚起（T.636）、あるいは枠付け（T.636、T.637、T.638ff、T.641）によって主題の結合を強調する役割を担っているのである。また、「漸次的結合の構想」と総休止の密接な関係は、《交響曲第 5 番》第 1 楽章においても顕著に表れている。《第 5》の場合、漸次的に結合されるのは導入部から第 1 主題部にかけて呈示される 4 つの音楽的素材であるが、それらの間に挿入される音楽的断絶としての休止は、素材相互の異質性、非結合性を強調することによって「漸次的結合の構想」の第一段階を形成している。

従来のブルックナー研究において、総休止は主に単なる形式の分節手段、残響のための空白、あるいは「形而上学的」なるものの表象として意味づけられてきた。しかし、本論文の分析によれば、それらは楽章の全体構想を具現化する上で不可欠な音楽的要素に他ならないのである。